

2021年3月7日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書16章5～15節

説教題：あなたがたにとって益

カナダで開拓伝道を始めた頃、教会会議のお誘いで「開拓伝道の研修会」に参加したことがあります。長い講義が続きました。受講者がきつい思いをすることを察しておられたのか、1人の先生は講義の中に短く映画を取り入れておられました。1本は「炎のランナー」で、もう1本は「カサブランカ」でした。開拓伝道と「カサブランカ」がどう繋がるのか、最後まで分かりませんでした。しかし、「炎のランナー」の方は迫られるものがありました。「炎のランナー」、1924年のパリ・オリンピックにイギリス代表として陸上競技に出場したエリック・リデルという人を主人公にした映画です。彼は100mの選手でしたが、聖日礼拝を守るためにレースを棄権して、結局チームメートの配慮で400mに出場することになります。見せて頂いたのは、彼が400mの決勝を走る場面でした。彼は、走りながらだんだん喜びが高まってきて、最後は笑うようにして走るのです。何故かという、彼は「自分が走る時、神が喜んでいるのを感じる」というのです。喜びに溢れて走る彼の姿は、私には感動的でした。「自分が何かをしている時、そのことを神が喜んで下さっているのを感じる」、素晴らしいことだと思いました。それと同時に、神が喜んでおられるのを彼に感じさせたもの、それは正に聖霊の働きだろうと、印象深く思ったことでした。

イエス様の告別説教が続きます。イエス様は、説教の中で繰り返し聖霊について語られます。先週の箇所では「これから迫害の中で聖霊が弟子達を助けてイエス様を証しする」ということを語られました。今日の箇所では、イエス様が復活し、昇天された後、信じる者にやって来られる聖霊が、どのような働きをされるのか、そのようなことを語って行かれます。イエス様の言葉を通して、聖霊に働きに関して2つの面から学びます。

1：聖霊が来る意味

イエス様は、まず、聖霊がやって来ることの意味について語られます。弟子達はイエス様から「私が行く所へは、あなたがたは来ることができない」(13:33)と言われ、さらに迫害の予告です。彼らには、これからどうなるのか分からなかったし、動揺していたと思います。イエスご自身が「わたしがこれらのことをあなたがたに話したために、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています」(6)と言われるように、弟子達にしてみれば、この場面は、たまらない思いだったと思います。彼らはイエス様のために全てを捨てて、イエス様に期待をかけて、イエス様だけを頼りにして来たのです。それが「自分達から離れて行く」と言われるのです。一体これまでのことは何だったのか、そう思うでしょう。しかしその彼らに、イエス様は不思議なことを言われます。「わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです…もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところ遣わします」(7)。「私がいなくなった方があなた方のためだ」という言い方です。この箇所から聖霊が来られることの意味について2つのことを学ぶことができます。

1つは、神様は(イエス様は)私達と共にいて下さるということです。なぜ、イエス様がいなくなって、聖霊がやって来るのが、彼らにとって良いのでしょうか。イエス様がずっと一緒にいて下さった方が、彼らのためには良いのではないのでしょうか。目で見る事が出来れば、何かあったら助けを求めて行けば良いのです。しかしそうではあっても、イエス様が肉の姿を取ってお

られる以上、イエス様は、弟子達と、あるいはイエス様に従う人々と、いつも一緒にいるというわけには行きません。しかし、霊ならどうでしょうか。聖霊としてのイエス様であれば、弟子達と、そして私達一人一人と、いつでも、どこでも、共にいて下さることが出来るのです。イエス様は、天国に帰って行かれる前、弟子達に言われました。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ 28:20)。どうやって可能になるでしょうか。聖霊としてのイエス様であれば、聖霊を求め、受けた人は、世の終わりまでイエス様と一緒にいることが出来るのです。イエス様の約束です。イエス様は、今私達と共におられるのです。その意味でイエス様は「わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです」と言われたのです。

2つ目に教えられることは、私達は神の計画の中にあるということです。申し上げたように、弟子達にとって、イエス様との別れは「これまでのことは何だったのか、これからどうすれば良いのか」、大変な挫折と絶望です。だからイエス様が逮捕された時、十字架に架かった時、彼らはどうしようもなかったのです。まさか、その後に復活があり、さらにいつも聖霊(助け主)としてのイエス様を宿して、聖霊に強められて、支えられて、助けられて、慰められて、導かれて、歩いて行けるようになる等とは、思いもしなかったのです。しかし彼らに待っていたのは、その思いもしない祝福の現実だったのです。そのために、イエス様は一時的に離れて行かれたのです。CS ルイスは「神の意図は、私達を小さなキリストにすることだ」と言います。肉体を持ったイエス様に従っている時、彼らはイエス様の近くにいましたが、イエス様がいなければ何にもできない人達でした。でも聖霊を頂いた時、彼らは、あたかも小さなキリストでもあるかのように、主の業を為して行くのです。その意味でイエス様は、彼らにとって最善のことをされたのです。

私達も、信仰があっても、状況に目を奪われてしまいがちではないでしょうか。状況が良いと信仰深くなって、状況が悪いと「信仰があつたってダメなのだ!」とってしまうのではないのでしょうか。彼らは、大きな祝福が待っていることも知らずに、状況に振り回されて、悲しんで、絶望していたのです。しかし、弟子達には見えなかったけれど、神は、彼らの思いを遥かに超えて、彼らに最善の計画を持っておられたのです。私達にも聖霊(助け主)が与えられています。神が聖霊を通して私達に働いて、私達をも最善に導いて下さるのではないのでしょうか。神は言われます。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っている…それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」(エレミヤ 29:11)。私達に聖霊を与えるために、イエス様が苦しみ抜いて死なれたのです。神様は独り子の苦しみを見つめておられたのです。それほどまでにして与えられた聖霊であり、私達はそのような神のご計画の中に生かされているのです。神様が私達に最善を為されないはずがないと思います。確かに見えないことも多いです。しかし、状況に目を塞がれるのではなくて、私達の思いを遥かに越えて最善をなさそうとしておられる神に、聖霊に、目を向けて行きたいと願います。

2: 聖霊の働き

イエス様は、聖霊が来ることが弟子達のためであると言われた後、聖霊の働きについて要約されます。聖霊は何をされるのか、イエス様は8節で「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます」(8)と言われました。

1つ目に、聖霊は罪について教えなさるのです。9節では「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです」(9)と言っておられます。なぜ、イエス様を信じないことが罪なのでしょう

ようか。イエス様が公生涯で最初に言われた言葉は「悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ 1:15)ということでした。福音とは神の赦しです。「あなたをそのまま受け入れる」という神の赦しの宣言です。それにも拘わらず、人々はイエス様を殺してしまいました。しかしペンテコステの時、ペテロの説教に刺された人々は「私たちはどうしたらよいのでしょうか」(使徒 2:37)と言い出しました。どうして人々は変わったのでしょうか。ポイントは「罪の意識」です。イエス様の十字架を見た後、彼らは「自分も神の前に罪人ではないのか」、そう思い始めたのです。イエス様を信じないということは、自分の中に救われるべき罪を見ないということです。「私は私でやって行く、イエスなんか要らない」。きつい言い方ですが、そういうことではないのでしょうか。でも、彼らが「私も何と神の目に適わない存在か」と思った時、神の赦しの宣言が大きな恵みに変わったのです。「アメージング・グレース」を作ったジョン・ニュートンは、奴隷船の船長でした。そんな彼が神に助けられた時、「こんな私が赦されるのか。神の恵みとはそんなに大きいのか」、と言って「驚くような恵み(アメージング・グレース)」という歌を作りました。亡くなる時、「キリストは私にとって、とんでもない救い主だった」と言って天に帰って行きました。その全てを導いたものは何だったのでしょうか。私達に罪を認めさせ、「イエス様、ありがとうございます」と思わせて下さるのは、聖霊の働きなのです。

2つ目に、聖霊は義について教えるというのです。10節「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです」(10)と言われます。義とは、神の目から見て「正しい」という意味です。申し上げたように、私達に「神の前に正しい」という義はありません。それはイエス様だけに言えることです。イエス様は、神の前に全く正しく生きて下さいました。それは、不義なる生涯しか送ることが出来ない私達を、死後の裁きの時に、イエス様の義の生涯で覆って下さるためです。人は、イエス様の義の生涯と、13節に「やがて起ころうとしていることを」(13)とあるように、この後起こる十字架の贖いによって義と認めてもらえるのです。しかし、そのイエス様を、人々は、極悪人、危険人物として裁いて、十字架に架けてしまったのです。人々に、イエス様の「正しい」は見えなかったのです。しかしイエス様が「わたしが父のもとに行き」(10)と言われるのは、それらの義の業を全て成し遂げて、父の許に帰られるということです。それは、神様がイエス様を義(正しい、良し)とされたということです。そのことが、聖霊の働きによって、やがて人々に分かるのです。

そして私達は今、犯罪者として十字架に架けられた人を「救い主、私のために生きて、死んで下さった方」と認め、感謝し、礼拝するのです。「私はあなたのために死んだ。あなたは私のために生きるか」と問われ、心を震わすのです。そのように導いて下さるのが聖霊の働きなのです。

3つ目に、聖霊は裁きについて教えると言われます。11節で「さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです」(11)と言っておられます。弟子達は、やがてほとんど全員が殉教して行くこととなります。弟子達だけではありません。キリスト教迫害の嵐が吹き荒れる時、世の力は強いように見えました。一方クリスチャン達は、あまりに力がない、あまりに弱い存在のように見えました。しかしなぜ、そんな弱いちっぽけな彼らが、強大な力に屈しなかったのでしょうか。なぜ、体を張って最後まで抵抗したのでしょうか。ポリュカルポスというリーダーは、「キリストを罵れ。そうしなければ焼き殺すぞ」と言われた時、こう返事しました。「あなたは、ひと時しか燃え続かず、すぐに消えてしまう火で私を脅かすつもりですか。それは、あなたが、来るべき審判の折りに邪悪な者を待ちかまえている火を知らないからです」。彼らは、この世を

支配している悪の全てが、最後には裁かれることを知っていたのです。そして世の支配者であるサタンも、十字架によって既にイエス様に負けたことを知っていたのです。だから、世の力は彼らを迫害するかも知れない。しかし、彼らの永遠の命を奪うことの出来る者は、誰もいないのです。だからイエス様はこの後で言われます。「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです」(16:33)。

クリスチャン達がこれらのことを見る事が出来たのも、聖霊の働きです。聖霊が、世の悪は裁かれることを、必ずそうなること、もう始まっていることを、彼らに見せていたのです。そしてそのことを見ていた人々は、死を越える命に生かされたのです。宗教改革の時代、多くのアナバプテストが信仰のために迫害されました。1人のその町でも善人で有名だった青年が、異端のレッテルを貼られて処刑されることになりました。町のある有力な婦人が、はりつけになっている彼に言いました。「私があなたを引き取って、自分の子供として生涯面倒をみるから、『自分の信じていた教えが間違っていた』と一言言って、赦してもらって、降りて来なさい。今ならまだ、それが出来るから」。彼は、その婦人にこう言ったのです。「私は、それを神が喜ぶとは思いません。私は神が喜ぶことをしたいのです。だから、この信仰をしっかりとって死んで行きます。神が迎えて下さるでしょう。アーメン」。「神が喜ぶ方を選びたい」と言って信仰を守り抜いて行ったのです。天で大いなる祝福に囲まれたことでしょう。彼もまた、神の裁きこそを何よりも大事に考え、死を越える命に生かされて行ったのです。

3：終わりに

今日、2つのことを申し上げました。皆さんが今、御自身の心に罪を見ておられるなら、キリストの赦しを受け取っておられるなら、終わりの時に救われることを見ておられるなら、それは聖霊の働きです。その聖霊は、これからも私達を神の最善に導いて行かれる現実の力です。「聖霊は御言葉と共に働く」と言われます。聖書を通し、祈りを通し、聖霊の働きを求め、聖霊に導かれて、神の最善の道を歩んで行きたいと思えます。